水稲通信

田植え後の水管理
中干しの実施と品質・食味向上

菊池中央・営農課
坂本 仁

田植えから30～35日頃（7月下旬頃）には無効分げつ期に入ります。
この時期に水を抜いて中干しを行うことで、土中に酸素が送られ、根の力の衰えを防ぐとともに、下位節間の伸長を抑え倒伏防止につながります。また、無効分げつを抑制して、大きく・揃いのよい穂をつくります。土を固めることで、収穫前の落水期の延長も可能となります。

中干しの時期

茎数が18～20本程度となる田植え後、30～35日頃に行います。分げつが緩慢で茎数が確保できていない場合は開始時期を遅らせることも必要ですが、幼穂形成期（幼穂長2mm程度）までには終了させてください。

中干しの程度

田面に小さな亀裂が入る程度を目安に行ってください。1週間程度を基本として実施しますが、田んぼの水はけや天候に応じて変える必要があります。

中干し後の水管理

中干し直後に湛水すると根が弱りますので、田面に水が回る程度に走水を行い、徐々に湛水してください。
中干し終了後は、間断灌水で根の活力を維持しましょう。

品質と食味の向上

（28苦土重焼燐・マルチセブンの追肥）　**施用時期　7月下旬　施肥量　20kg/10a**

りん酸の働き:稲体の成長やエネルギー代謝に重要な要素。
苦土の働き:光合成作用に関与し、りん酸の吸収と移動を助け、食味の向上が期待できます。
ケイ酸の働き:受光態勢を良くし、高温や日照不足に負けない強い稲体をつくることに役立ちます。

穂肥の時期・施肥量は適正に

（1）1回目穂肥の目安…8月7日～9日頃（出穂前18～20日）

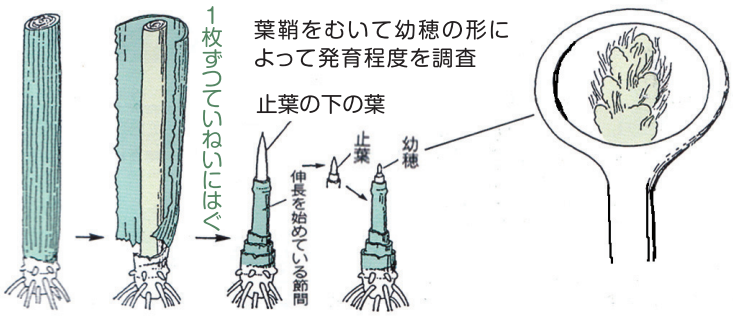
◇出穂前22～25日頃は、第4節間を中心に下位節間が伸びる時期であるため早い穂肥は倒状しやすい状態となる。
◇幼穂長が7mm以上になると第5節間の伸張が止まり、第4節間がわずかに伸びる程度であるため、穂肥を安心して施用できる。

施肥量（1回分）
10～20kg／10a

（2）2回目穂肥の目安…8月17日～19日頃（出穂前8～10日）

◇幼穂長10cmの時期には、下位節間の伸張は終わり、一穂籾数の退化を防ぎ登熟をよくする。

幼穂長でみる適期の見方



注意

化学肥料に比べて、油粕や有機配合肥料は肥効の現れ方が遅いので、追肥として施用するときは、有機質肥料の特性を考慮し施用する必要があります（有機配合肥料は有機率に差があり、高いものは肥効が遅く、低いものは早い傾向にあります）。

☆基肥一発肥料を施用されている方は、基本的に穂肥の必要はありませんが、田植えの1週間以上前に散布されたり、高温で経過し登熟後期に肥効切れが心配される場合は、各中央支所担当へご相談ください。